

## S. I. ハヤカワ『思考と行動における言語』1～5章

### 意味論的寓話

合意によって人間は円満に仲よく共存する事を知るのだが、それはじつに気ながな思考・話し合い・議論・説得から生まれるのだ

#### 一 言語と生存

- 1.1 人間の生存優位をもたらしているのは、コトバを用いたコミュニケーション
- 1.2 人間は言葉を用いる事で巨大な協働的神経系(huge cooperative nervous systems)を形成し、生存可能性を高めることが出来る。
- 1.3 言語を使うことで、人間は知識をプール(蓄える)事が出来る。知識の蓄積に際して、文字の発明が大きく寄与した。
- 1.4 私たちは何かを見聞きしたり、人と話したり、ものを考えたりしているときも、常にコトバのナイアガラの滝に晒されている。言語についての無意識の仮想(unconscious assumptions about language)は人によって全く異なる。それがディスコミュニケーションの原因である。

#### 二 記号

- 2.1 人間は記号化(物質的価値に記号的価値を付与)する動物である。(Ex)鎧、富裕層の衣服、ネクタイ、黒人
- 2.2 記号と記号で示されているものとの間には何の必然的な関連もない。記号とそれが代表している物とは互いに独立している。にもかかわらず、われわれは皆、その間に必然的な関連があるかのように感じ、時にはその感じにしたがって行動する。
- 2.3 コトバも劇も、恣意的なもの。それを事実と間違える人間がいる。
- 2.4 記号は物そのものではない。コトバは物ではない。地図は現地そのものではない。(Ex) 借金して富裕の記号である高級車を購入
- 2.5 言語的世界は外在的世界を便宜的、恣意的に表したもの  
報告は経験を便宜的、恣意的に表したもの  
地図は現地を便宜的に、恣意的に表したもの

### 三 報告、推論、断定

- 3.1 報告とは、実証可能な叙述
- 3.2 推論は、既に知られている事を基礎に、知られていないことについてなされる叙述である。
- 3.3 断定とは自分の価値判断を含んだ叙述
- 3.4 一見外在的世界の状態を報告するようで、実は全くそうではない発言。それは犬猫の「うなり」や「ゴロゴロ」と一緒。
- 3.5 事実を重ねることなく述べられた断定は、人の視界を曇らせ、思考を止める。
- 3.6 日常生活の言語を使っている限り、完全な公平さには達せられない。色が入ってしまう。
- 3.7 自分の中の先入観を認識できていなければ、良い報告は出来ない。

### 四 文脈

- 4.1 辞書とは語の「真の意味」ではなく、これまでどんな意味で使われたかをできるだけ忠実に記録する仕事。
- 4.2 言語習得の 2 パターン。話の流れ(言語的文脈)からと、実際の状況の観察(物理的・社会的文脈)から。
- 4.3 外在的意味とは実在するもの。内在的意味とは自分の頭の中に想起されるもの。
- 4.4 いかなる語も決してまったく同一の意味を二度持つことはない。
- 4.5 コミュニケーションにおいて文脈を無視する事は愚か。
- 4.6 文脈は大事だが辞書の有用性を否定するわけではない。

### 五 言語の二重の仕事

- 5.1 内包(内在的意味)は、情報的内包と感化的内包とに分かれる。
- 5.2 情報的内包が含むのは語の定義と、その外延。
- 5.3 感化的内包とは、ある語によって引き起こされる個人的感情。
- 5.4 どこの言語にも、感化的内包が大き過ぎてタブーとされる言葉がある(Ex)性や差別に関する言葉など
- 5.5 あらかじめ断定を組みこんであるコトバもある(Ex)スリ
- 5.6 日常生活においては、事実を正確に報告することに加え、相手がどんな感情を抱くかに留意しなければならない。